

53

第一次世界大戦時パリで活動した 第四厚誼病院(日本赤十字)

小林 晶

福岡整形外科病院

2014年は第一次世界大戦勃発百周年を迎え、関係各国で記念行事が行われた。我が国でも若干の報道はあったが、医療救援の実態は皆無であった。今回はパリで活躍した我が国の医療救援活動の詳細を報告する。

第一次世界大戦では我が国は連合国側として参戦した。軍事活動についての記録は多いが、医療救援においても大きな活動が見られた。それはパリに病院を設置して行った本格的な医療救援である。

陸軍大臣の要請から日本赤十字社(以下日赤)はジュネーブ条約により「博愛ノ大義ニ基キ仏英露ノ三カ国ヘ救護班ヲ派遣スル」ことを決定した。日赤はかつて看護婦組織(以下当時の呼称によって看護婦とする)を海外に派遣した経験はなく、他国の救護班に劣らぬよう責任の重大さを考慮して、全国各支部から優秀な看護婦20名を選抜した。医員には東大医学部から救護班医長として外科助教授塩田廣重、助手茂木藏之助、日赤滋賀支部の渡辺純一郎が選ばれた。その他、職員を含めて班員総数31名であった。派遣期間は5か月とした。

1914年(大正3年)12月16日横浜を出港、翌年2月4日51日間を要してマルセーユに到着、同月5日パリ着。既にそれまで英国救護班が使用していた、凱旋門近くのアストリア・ホテル(8階建て、客室数300)が我が国の救護班用に用意されていた。仏側は陸軍省直轄の病院組織として事務連絡は仏人事務官が当たった。比較的上流階級夫人数人が篤志看護婦として助力したが、これは仏社交界では誇りとされたという。我が国から持参した梱包は364個であったが、この膨大な荷物も仏兵の助力により数日間で整理され、2月15日より診療を開始した。ただ、X線機器だけは仏側から貸与されたが、あとの機器、薬品、包帯材料、病衣などは我が国からの自給であった。パリ市内には政府からの援助でなく、寄付行為のみで運営している厚誼病院は英・米・ロスチャイルド病院の3病院のみで、我が国の病院は正式にはMinistère de la Guerre, Hôpital Bénévole No 4 bis. Croix-Rouge Japonaise「陸軍省直轄第四厚誼病院(日本赤十字)」と呼ばれ、病院名を玄関に掲げ屋上に日章旗を掲揚した。院内は二つの手術室を備え、病室は清潔に整頓され職員の行動は規律が保たれ、食事も仏人により自国風の内容で提供された。病床は150床で、この中の数室を重傷患者、術後患者用とした。

戦場から後送された患者は仏軍医部を通過して病院に割り当てられ者と直送される重傷者であった。戦場からの傷病兵は24時間消毒室に入れ、その後患部をさらに消毒する手段を取った。手術は間断なく行われた。歩行可能なものは仏兵を付けて散歩させている。1週間に1回は家族に病状を知らせた。演芸会、コンサートなどの娯楽も行われた。最初は仏人も東洋人の手腕、行動に多少の危惧を抱いた感があったが、治療成績の良好なことと、職員の応接の丁寧さ優しさで病院の世評は鰻登りで、戦傷者以外の市民の受診希望が殺到し始め、有名人の紹介状持参者まで来院する有様であった。戦傷兵の増加と入院患者の残留希望の増加もあって、退院が滞って困惑する事態も発生した。

地元と外国特派員はすべて我が国の病院を賞賛した。「一切の設備は日本で準備され、豊富で良く整頓されている。小さな日本人看護婦は大きな負傷兵を起こし、包帯法は見事なもので実に器用である」、「職員各自は患者の感情を理解し、愛嬌のある微笑で迅速に丁寧に礼儀を弁まえて事に当たる」、「梱包の空き箱を棚に重ねて利用し、薬瓶には日本語とラテン語の名札を付け理解し易くしている」、「言葉は少なくともたどしくても、技術はすべてヨーロッパを凌駕している」などである。

これらの事実から仏側から滞在期間の延長を希望されたのも当然であった。熱望されて1916年7月までの滞在期間延長は行ったが、さらなる希望は叶えられず惜しまれつつ帰国の途につき、1916年9月13日神戸に到着任務を終えた。なお、口演で入院に関する統計数値を示したい。